

昔々 フォーイフォーイ^①

崔 仁 勲

(李応寿・訳)

〈登場人物〉

妻

夫

「ケトンオモム」〈隣のおばさん〉

老婆

村人一、二

「ボジョル」〈捕卒、昔役所で捕盗に務めた邏卒のこと〉

一、二、三

一場

あばら屋、雪が降っている。夕暮れ時、ほのかな灯火、妻、部

屋で針仕事をしている。産み月が近い。十五かもしくはそれより下。縫物を持ちあげ、目分量している。家具と呼べるものはほとんどない。舞台は四角の板敷きの部屋だけで、その上に彼女が坐っており、燈火台一つと火鉢、その他は何にもない。

縫物を持ちあげたまま、時折ぼんやりしている。

そうしては自分のお腹を見おろしている。

静かにさする。

気配。

耳をそばだてる。

風の音。

耳をそばだてる。

風の音。

再び縫物の手を進める。

灯火の芯を針先であげる。

泉の鳴き声。

耳をそばだてる。

火鉢にかけた鍋を覗いてみる。

火箸で灰をととのえる。

再び針仕事に戻る。

気配。

耳をそばだてる。

風の音。

耳をそばだてる。

風の音。

妻、立ちあがって部屋を出る。(廊下からおりる)

「サリムン」へ柴戸まで来て暗闇の中を遠く見つめる。

雪が頭の上に積もる。

風の音。

梟の声。

間。

ゆっくり部屋に戻る。

気配に振り返ってみる。

間。

再び部屋に向かう。

灯火の芯をあげる。

縫物を取りあげる。

時折、縫う手を休める。

お腹をさすってみる。

笑う。

風の音。

梟の声。

顔をあげ、耳を傾ける。

気配。

立つ。

夫、庭に入ってくる。

「チゲ」へ背負い子に袋を二つ重ねて背負って来た。

「チゲ」を下ろして廊下の隅に立てかける。

妻、「チゲ」を下ろすのを手伝う。

夫の肩の雪を払う。

夫、履物をはたく。

妻、夫のズボンをはたく。

すべての動きはゆっくりと、一つ一つがその時ふと思いついた

かのようにのろのろと。

すべての人物たちの科白は普通より遥かにのろい。ぼつりぼつ

りと、思い出すかのように。

夫は甚だしい吃り。

すべての人の遣り取りは退屈に、しかし本人たちにはそれが自

然のように——一人の科白が終り、相手の科白が始まるまでの

間も普通より甚だしく長い。

何でもない科白をそのように、難しく語る。

妻 道が滑ったでしょう。

夫 す、す、すこし。

妻 (袋を触りながら) うまくいったんですね。

夫 お、お願い、お願いした御蔭で――

袋を廊下に運ぶ。

妻、袋を触りながら、

妻 粟と、豆と――

夫 う、うん――

妻 早く、入って。朝御飯もろくに食べてないのに、こんな時間まで、お腹がすいてるでしょう。(袋を移す)

夫 は、は、ほっとけよ。(妻、間かずに袋を移す)

夫 (荒っぽく) は、は、ほ、ほっとけと言っているのに。

お、お、お、重い物、も、も、持つのは、や、や、やめなさい。(妻の手から袋を取り上げ、自分が運ぶ)

夫 こ、これでよし。

二人、顔を見合わせる。

妻 あなた、ここに坐って体を暖めたら。(「アレツモク」⁽²⁾に火鉢を押しやり、鍋をかけ直す)

夫 だ、だ、だ、大丈夫。

妻 (膳の支度をしながら) さ、ここへ、坐って。

夫 ちよ、ちよっと待って。こ、こ、こ、ここに、す、す、坐れ。

妻 あなた、私はずっと部屋にいたんだから。

夫 (怒りながら) す、す、す、す、坐れとゆうのに。

妻、仕方なく「アレツモク」に坐り、膳の支度をする。

妻 お腹がすいているでしょうに。

夫 (背負って来た袋を開け、粟を一「サバル」へ器へ取り出す)

妻 あなた？

夫 (袋の口を締める)

妻 何しているの？

夫 (「サバル」を持って立つ)

妻 (一緒に立ちあがりながら) それを――

夫 い、いいから、す、坐っていなさい。め、め、飯をた、炊いてや、や、やるから。ふ、冬じゅう、め、飯

らしい飯もく、喰わないで、こ、子供をう、産むとこ

— 114 —

外で気配。

二人、息を殺す。

木の枝から雪が落ちるような音。

夫 (低い声で) な、な、な、な、何でもな、な、な、

ないだろ？

妻、耳をそばだてる。

妻、門に近づき、外を覗こうとする。

夫、掴む。

妻 何でも——ない——みたいね。

夫 うん。

妻 (火鉢の中を掻きまわしながら) 家には持っていられるものなんか——何にもないから。(ふと種袋に目を止め、口を噤む)

夫 (素早く、外に向うように) そ、そ、そ、そ、そ、そうだとも、ど、ど、ど、ど、ど、泥棒さ、さ、さ、様たち

もも、も、も——も、も、もののあるところにいい、い、い、いらっしまったほうが……そ、そ、そうだろう。

妻 そうよ。まあ——こんな時は——心配がなくて——

いいのよね。

夫 そ、そ、そ、そうとも。ほ、ほ、ほ、ほんとうに。

間。

外では雪が降りつづいている。

二人、動かない。

やがて安心し、姿勢を直す。

狼の鳴き声。

その声に耳をそばだてる。

妻 この雪が——最後の雪——かしらね。

夫 こ、今年はや、ゆ、雪がた、たくさん降ったから、

は、豊年にな、な、なればいいけど。

妻 是非。

夫 く、く、喰扶持がひ、ひ、ひ、一人分ふ、増えるから——

妻 一、二才の間に——食べるたつて——そんなに食べるものじゃないでしょ。

夫 き、凶作にお、大人はう、餓えじ、死し、こ、子供

はた、食べず、すぎてし、死ぬという話があったじゃないか。

妻 水でも飲みすぎて——じゃなくちゃどこかの——き

つと——ものの豊富な村で——あつた話でしょう。(腹をさすりながら)生まれても、この——辛い世——生きていくのが——かわいそう。

夫 わ、わしらのせ、生活が、い、い、いつか、変わったことがあるか。つ、つ、つ、土虫へ農民のことゝのこ、子供は、つ、つ、つ、土虫なのさ。て、天がき、決めてくれたことを。

妻 あなた、私はこのまま——このままが——いいわ。

夫 ……

妻 産まなくて——

夫 ？

妻 子供も——この世で——苦しまなくてもいいし——あなたも、——私に——種蒔用の粟を食べさせようなんて、——こんな幸せが——又、くるかしら。

夫 お、お、お、お腹の子を、う、う、産まなかった

は、は、話など、き、きいたことがあるか？

妻 それは——そうだけど。

夫 あ、あ、あのド、ド、「ドトリ谷」へ地名△が、あ、あ、あるじゃないか？

妻 ええ——

夫 く、く、くる春に、た、た、た、種蒔がお、終ったら、あ、あそこをす、す、すこし、た、耕そうと思う

んだが。

妻 耕す？

夫 うん。

妻 あそこを——どう——やって——耕すの。

夫 きよ、去年のな、夏によ、よくみ、み、み、み、といたんだが、て、手間はか、か、か、かかるだろうが——すこし——苦勞すれば。

妻 坂で、——砂利——なのに——

夫 だ、だからあ、あ、あそこがの、残ってるのさ。

妻 それは——そうだけど。

夫 あ、あそこには、馬鈴薯でも、う、植えたら、しょ、食糧の、す、す、すこし、た、た、足しになるだろう。でも、それが——全部——私たちに、まわってくる

——はずがないでしょう？

夫 お、納めても、す、すこしは、の、残るだろ。

妻 私も——子供が——生まれたら——一緒に登って、働くわ。

夫 そ、そしたら、ら、来年のは、春には、あ、あ、あそこをた、耕そう。

妻 一昨年のような——凶作さえ——なかったら。

夫 そ、それより、わ、わしは——

妻 ……？……

夫　　そ、それよりも、

妻　それよりも——？

夫　あ、あ、あのど、ど、泥棒がさ、さ、さ、盛んだそ
うだが。

妻　泥棒が——盛んでも——家からは——　何か、持
って行かれるかしら？

夫　そ、そ、そ、それじゃな、な、なくて。

妻　……？

夫　ど、泥棒が、こ、こ、こ、こ、恐いからじゃない。
ほ、ほ、ほんとうに——

妻　（首肯）

夫　きよ、凶作にな、な、なると、ど、ど、ど、泥棒が
さ、さ、さ、盛んになる。ど、ど、ど、泥棒がさ、さ、盛
んになると、と、と、討伐が、あ、あ、あ、あ、ある
んじゃないか。

妻　あなた。（夫の腕を掴む）

夫　へ、へ、へ、へ、兵隊に、ひ、ひ、ひ、ひ、引っ張られたら

妻　役所に——「ポジョル」が——あんなに——たくさ
んいるのに。

夫　わ、わ、わ、わしらにはお、お、多くみえるけど、
そ、それく、くらいではど、ど、泥棒の群にあ、あ、

あてにもならないんだ。そ、それで、あ、あの年もそ、

そ、そ、そ、その、ソ、ソウルから来たへ、へ、兵士

たちが、し、し、始末をつ、つけたじゃないか。

妻　そうね。

夫　……

妻　それで、あなた——世間の噂では——どうなの？

夫　ど、ど、ど、ど——ど、ど、ど、泥棒か？

妻　ええ。

夫　うん。む、む、む、む、向うの村に、に、に、に、
逃げたそうだ。

妻　そうなの？

夫　そ、そ、そ、そ——そ、そ——そ、そ、そうだそうだ。

妻　そうよ——そうでなくちゃ。我らの子供が——生ま
れる、年からは——是非、豊年で、泥棒の——ない——

夫　（4）そ、そ、その言葉が、そ、そ、その言葉じゃな
いか。

妻　あら——そうだね。

夫　そ、そ、そ、そうなると（妻の腹を撫でながら）、こ、

こ、この子も幸せ——わ、わ、わ、わ、わしらも幸せ。

妻　あなた、（自分の腹をさすりながら）この子は、幸運な
子に違いないわ。

夫　ど、どうしてわ、わ、わかる？

妻 あたり——まあでしょう。これを見てよ。(種袋を撫

でながら)あの方が、こんなに——又、貸して——下さ

ったんですもの。

夫 そ、そ、そうだ。——と、峠の向うの、キ、キ、キ、

金^{きん}さんは、て、手ぶらで、帰らせてしまったんだ。

妻 ほら、そうでしょう。すべてが——我が子の——幸

運ですもの。(種袋を撫でながら)こんなに、一杯、持つ

て来てくれたんじゃないの。

夫 い、い、い、一杯(徒に種袋を移したり、突きさしたり

してみる)。

妻 そればかりか——(耳を傾ける)

夫 (一緒に耳を傾ける)

妻 雪が——あんなに。

夫 (首肯)

妻 (夫の腕を掴む)

夫 (妻の腹を撫でながら)

妻 (笑う)

妻、種袋を改めて整える。夫、妻の動きに従い、手伝う。

夫 お、お、お、男の子だったら、

妻 お父さんを——助けて、

夫 は、は、は、畑仕事にで、で、で、で、出かけ、

妻 女の子だったら——

夫 お、お、お、お母さんをた、助けて、い、い、い、

家仕事。

妻 あなた。

夫 うん?

妻 私も——畑に出る時は——どうするの?

夫 つ、つ、つ——(休んでから)——つ、つ、つれて行

く。

妻 あら——そうだね。

夫 そ、そ、そ——そ、そ、そうとも。

妻 涼しい——影に——寝かせて、

夫 うん。

妻 栗鼠を——見たり、鳥の——声も——聞いた

夫 か、か、か、川でみ、み、水浴びもさ、さ、させた

り、

妻 雲が——流れると——雲を見て——笑い、

夫 ほ、豊年にさえな、なれば、

妻 泥棒さえ——いなければ、

夫 お、同じこ、言葉だとゆったのに。

妻 あら——そうだったわね。

夫 ……

二人、笑う。

夫 お、お、お、おい。さあ、ね、ね、ね、寝よう。

妻 あら——そうだね。

夫 ……

二人、笑う。

妻、灯を消す。

狼の鳴き声、遠くから。

二場

春、同じ舞台、子供の泣き声。

妻、台所から出、部屋に入り、子供を抱いて出て来る。

妻 おー、おー、赤ちゃん——お腹がへって、さ、さ——

(乳を吸わせる。子供、泣きつづける)

妻 乳が出ないのね——どうしよう。母が——何にも食

べてないから——乳が出ないのね。(立ってあやしな
ら)

我が子は良い子 可愛い子

乳も飲まずに 成長し

駄々をこねつつ 育ったが

凶作になりや 泥棒さ

泥棒すれば 広い世に

行くところなど ありやしない

役所の柱の てっぺんに

さらし首だよ なれの果

黒い鵲 ついばめば

母も痛い 子も痛い

泣き泣き暮す 身の上に

ああ恐しや よその子は

我が子は良い子 可愛い子

部屋に入り、子供を寝かせてから出る。

峠の向うに住んでいる「ケトンオモム」が入ってくる。

ケオ ハケトンオモム▽ 子供は——丈夫に——育ってるかい。

妻 「ケトン」の——お母さん。

ケオ 寝てるみたいだね。

妻 ええ——たった今。

ケオ 乳は——よく——出てるのかね？

妻 それが、

ケオ かвайそうに、食べなきゃ——出るもんも出ないよね。丈夫な体も、腹べこじゃ——春なのに、食欲を——そるもんも——たくさんあるだろうに——さ、これ。

妻 あら、これは、何ですか——

ケオ たいした、もんじゃないよ——団栗の、「ムク」
ハ心天^{よきん}だよ。

妻 お宅にも、子供が——たくさんいるのに。

ケオ 食べても——食べても、限無しの、餓鬼が、九人も、いたら、これくらい——あってもなくても同じだよ。必要な、人に、あげようと、持って来たんだ。

妻 こんなに食べものが——貴重な時に。

ケオ 去年の、夏、私が、腸チフスに、かかった、時、

あんた、じゃなきゃ——誰が、あんなに一生懸命、面倒をみてくれただろう。ありがとう——忘れられない、ことだよ。

妻 そんな。

ケオ あんた、さあ、味見して、ごらんよ。ほら、ここに——あたし、醤油も——すこし——持って来たから。
(小さな壺を差し出す)

妻 まあ——どうも。

ケオ さ、器を、一つ——持って、おいで。(妻、台所に入り、器二つと匙二つを持ってくる)

ケオ よし。(くり鉢から団栗の「ムク」を器で掬い、妻の前に押しやる)

妻 おばさんも。

ケオ (手で遮りながら) 私はい、いいから、——さ、——早く。(妻、一匙口に入れる)

ケオ どうかね？

妻 まるで蜂蜜ね、蜂蜜。

ケオ (つんとして) 私ね、団栗の「ムク」、一つだけはね、昔からすこし——手馴れたもんよ。(食べるのを見ながら) ほら、顔が、ふっくらしてきた。実家の、お母さまが、見たら——どんなに、胸を、痛めることだろう。
(「チマ」⁽⁶⁾の端で涙を拭う)

妻、匙の手を止めて涙ぐむ。

ケオ おやまあ、こ、こ、この口ったら。(自分の口を叩

きながら)。「ケトンアボム」に——やつつけられても、仕方ないね。そうそう——家の「アボム」が、私の、口と——腹(指しながら)が、閉じられていたら、——自分の、運は、開けた、だろうつていつてるよ。でもね、正直に、言ってさ、——その、腹は——誰の、ために——開くかってことさ——うん?

妻 (笑いながら)子供が——多くても、皆、大きくなれば——糊口の——心配はないでしょ。

ケオ 糊口が——何ですって? だって耕す、土地が、あつてこそ、——口過ぎさ。——ところで、ほら、あの——話、聞いた?

妻 はい——

ケオ ほんとに、珍しい、ことも——あるね。世の中が、乱れると——珍しい、ことも——ある、ようだね。あんたは、——あの、龍馬の、鳴き声を、聞いた?

妻 (首を振る)

ケオ 私も、聞いたことはないけどさ、え——と——あの、

峠の向うの、「セドルオモム」は、——二回も聞いたんだってよ。

妻 そうですか?

ケオ うん。

妻 どんなふうに——鳴くんだった?

ケオ 聞いたことないのに、知るもんかね? 昨日の、夜も、何とかして——聞こうと、狙ったのに、「アボム」が——ねえ、人を、ほつといて、くれないのさ。歟を持って、一日中畑仕事で、疲れて帰ってくるのに、夜は夜なりに、「アボム」が、飛びかかって来て——又——夜仕事が始まるわけ。それが——終ると、ずつと、夜明けまで、死んだように——寝ちゃうのさ。屍の、耳に、聞えるもんか。もう年だから——元気が、いま一つさ。——しかし、ね——将師が、生まれると——龍馬も、——生まれるんだそうだよ。

妻 将師が?

ケオ (首肯) そうだってよ。

妻 将師って——どんな、恰好かしら。

ケオ それがさ、この間——亡くなった——実家の、お祖母さんの、話ではね、体には——鱗が、生えてて、——両脇の下に——翼が——付いているんだそうだ。

妻 まあ——それじゃ——家の子供は——違うわ。

ケオ 勿論、当り前なことを。そしてさ、生まれてすぐ、歩けるんだそうだよ。

妻 家の、赤ちゃんは——未だ、寝返りも、うてないから、ホホ——そうじゃないわね？

ケオ そうそう、もしも将師が——生まれたら、自分も死に、——父母も、殺される。——そればかりか、村中まで廃墟に——してしまふんだとさ。

妻 村中は——なぜ？

ケオ 以前に——ある、村で——将師が、生まれたんだそうだけど、地勢が、悪い——からだと言って、——村中に——火を、つけたもんだから、人も——全部、焼け死んだそうだよ。

妻 ああ——どうしよう。罪もない、家の——赤ちゃんが——（部屋のほうを見ながら）

ケオ それでさ、龍馬が、鳴くという——あの、山が、この、村だけでなく、——三つの、村に、わたっているから、——恐らく、向うで——将師が、生まれたんじゃないかね。

妻 そう——そうなら——そうだといいわ。

ケオ 向うでは——役所から、命令があつてね——龍馬が、泣くとは——必ず、将師が、この、村で——生まれた、はずだと言って、生まれたばかりの、赤ん坊か

ら——十、以内の、子供までを——漏れなく、調べて、少しでも——風変りな、子供が、いたら——全部、掴まえるんだそうだよ。

妻 まあ。

ケオ それでさ、家ごとに、子供が——力持ちの、子のように——みえるかと、両親たちが、恐れているんで——それをいいことにしてさ、家の——餓鬼どもが——今や、木樵りに行けないといって——寝転んでばかりいるの。そればかりか、それ以後は——目の前の——尿瓶、一つ——動かさないのね。

妻 へえ。

ケオ あいつら——全部、駄目に、なっちまう——のね？ こんなふうだと、将師——にならないためには——みな——生きた屍になるしかないよ。

妻 赤ん坊、だけじゃなくて——ずいぶん、大きくなつた、子供たちも。

ケオ それがさ——その、龍馬というのが——何歳のものか、判らないから、将師が——何歳か、判るはずないよね？ 誰か——見た人もないでしょう？ だから、とにかく——子供という子供は、すべて——役所で——取り締まるんだそうだよ。

妻 （ほっとしたかのように）私は又——

ケオ おや——私は、もう——お暇しなきゃ。どれ——
赤ちゃんでも、一遍——見せてもらおうか。いや、私
が——行こう。

静かに部屋を開け、(腹を敷居にかけ、身を乗り出して) 子供
を覗き見る。立ちながら、

ケオ ヘー、この子、晴れ晴れとした、顔が、将師に——
そっくりだわ。

妻 (嬉しそうに) そうですとも。

夫、大急ぎで入ってくる。

夫 お、お、おい。お、おい。

ケオ どうしたの、そんなに——急^キき込んで。

夫 あ、あ、あ、そ、その、い、い、い、今、ポ、「ポ
ジョル」たちが——ド、ド、ド、ド、「ドトリ谷」から、
や、や、や、山のは、ほ、ほうに、は、は、入ったよ。

ケオ 「ポジョル」たちが——何故?

夫 りよ、りよ、龍馬を、か、狩りに、い、い、い、行
くんだそうです。

ケオ 龍馬が——この、村に——いるんだって?

夫 ウォ、「ウォンニム」へ郡守Vのめ、め、め、命令だ
そう。だ。む、む、村ごとに、ポ、「ポジョル」たちが、
じ、じ、じ、自分の村を、し、虱潰しに、し、調べる
そうだよ。

ケオ とにかく、将師だろうが、龍馬だろうが——この、
村にさえ——いなかったら。

夫 ポ、ポ、「ポジョル」たちが、さ、さ、さ、殺気立
って、の、登って行ったから、りよ、龍馬が、つ、擱
まるか——

ケオ 龍馬が——そんなに、たやすく——擱まるかね?

妻 まあ——あなた——この汗を——見てよ。

夫 わ、わしも、た、谷まで、つ、つ、ついて行って、
き、きた、ところだ。

妻 あなたが、どうして?

夫 お、お、おそらく、な、何日かにか、かけてや、や、
や、山狩を、す、するのだろう。し、し、下のほうの、
畑で、し、し、仕事をし、し、していたんだが、ナ、
「ナウリ」へ目上の人への呼び方、ここでは「ポジョル」の
ことVたちが、や、や、やって来たんだ。い、いっば
い、も、も、持てき、来た、ス、ス、「スルバブ」
へ酒飯Vを、か、担がされて、ド、ド、「ドトリ谷」
の、む、向うまで、行って、や、やっ、も、も、戻

って来たんだ。

ケオ 自分たちの、食べものを——自分の、背中で、担いだら——落雷にでも、合うっていうのかい。ふん——人に出合わなかったら——捨てて、行っちゃまうところだね。

夫 と、とんでもない。く、く、くる、時から、ひ、人にか、担がせてき、きたものをよ。

ケオ そうだろうさ。「ナウリ」たちが——ふん——まだ、種時きも、終っていない、——この忙しい時に——ハハ、そういえば——龍馬が、わけもなく、泣くものか——誰に、担がせて来たかね？

夫 あ、あ、あ——あ、あの、ケ、ケ、ケ、——ケ、ケ、「ケトン」ア、ア、ア、ア、「アボム」だったなあ。

ケオ ——おや、まあ、どうしよう。村の入口に、いたから——きつとそこで、掴まえられたんだろう。昨夜も、一晩中——夜仕事をしたのに——

夫 ——よ、よ、よ、夜も？

妻、ぐずぐずしながら、後ろ向きになる。

ケオ いや——普通の、仕事じゃ、なくて——その、まあ、この——おしゃべり（口を叩く）いえ、いや——そ

んな話じゃ——なくて——ほんとにもう、この——おしゃべりが（口を叩く）。

この時、歌の声。

我が子は良い子 可愛い子
乳も飲まずに 成長し
駄々をこねつつ 育ったが
凶作になりゃ 泥棒さ

泥棒すれば 広い世に
行くところなど ありゃしない
役所の柱の てっぺんに
さらし首だよ なれの果

歌声、近づいてくる。

唄れた声。

三人、耳を澄しながら、

声のするほうに、

夫、数歩、近寄る。

老婆、出る。

まっ白な髪、曲がった腰。

ぼろぼろの着物に、

杖をつき、

腰には、韓国の、

昔の人々がしたように、

包みを巻いている。

ひらべったい包み。

ほとんど何にも入っていない。

夫 ど、ど、ど、どこから。

老婆 (三人をじっと見つめる)

ケオ 見たことのないおばあさんだね。

老婆 これ、水をいっぱい。

妻、台所に入る。

老婆、土に坐る。

妻 (台所から水を持ってきて) はい、これを。

老婆 (もらって飲む)

ケオ どこから、いらっしゃったの？

老婆 あそこから。(手をあげ、遠い所を指す)

ケオ あそこから？ 山の向うですか？

老婆 (首肯)

ケオ どこへ行くんですか？

老婆 (元氣のない凹んだ目で見つめる)

ケオ どこへ行くんですか？

老婆 息子、探しに。

ケオ 息子？

老婆 息子。

ケオ 息子が、どこに、いるんですか？

老婆 役所。

ケオ 役所？

老婆 (首肯)

ケオ 役所のどこにいますか？

老婆 高い所。

ケオ (少し呆れて) へえ、高い位の、方が、どうして、

自分の、母親を、こんなふうに、道端に、放り出すんだらう。それじゃ、どれほど高い位の方なんですか？

老婆 高い所。

ケオ まさか、「ウォンニム」には及ばないでしょうね。

老婆 もっと高い所。

ケオ おや、「ウォンニム」より高いとは。

老婆 もっと高い所。

ケオ え、それはどの位？
老婆 柱の上。

三人、お互に顔を見合わせる。

ケオ では、あの、もしかしたら、その、お婆さんの息子
子が、あの泥棒ですか？

老婆 (首肯)

ケオ それじゃ——役所の——柱の上に——首をさらされた——あの——泥棒が？

老婆 (首肯)

三人、後に下がる。

老婆 頭でも——持ち帰って——埋めてやらねば——お
水——どうも——ありがと。(杖に頼って立つ)

反対側に歩きながら歌う。

泥棒すれば 広い世に
行くところなど ありやしない

役所の柱の てっぺんに
さらし首だよ なれの果

黒い鵲 ついばめば

母も痛い 子も痛い

泣き泣き暮す 身の上に

ああ恐ろしや よその子は

我が子は良い子 可愛い子

三人、

老婆の歌声が

消え去る時まで、

動かずに

耳を傾けながら

立っている。

ケオ あら——それで——家の——「アボム」は——今
——どこにいるの？

夫 ま、ま、まだ、や、や、や、山に、い、い、い、い
るよ。

ケオ 「ナウリ」たちの所に？

ケオ まだ、そりゃ——一体どうして。一人は——こう

夫
ア、ア、ア、ア、「アボム」は、じ、じ、自分で、の、

の、残ったんだ。

ケオ　自分で残ったって。それは――どういうこと。

夫 ナ、ナ、ナ、「ナウリ」たちが、く、く、く、くる時

う、う、う、家ごとに、よ、よ、寄って、に、に、鶏

を、つ、つ、掴まえて、き、き、来たようだが、ケ、

ケ、ケ、「ケトン」の家の、た、た、た、種用の雌鶏めんどり

も、と、と、と、取られちゃったようなんだ。

え、まあ、な、なんてことだ。

夫、そ、そ、それで、と、時を、み、みて、そ、そ、そ

の、に、鶏をと、取り返して、か、か、か、か、帰る

つ、
つ、
つもりのようだったよ。

ケオ　なんてことだ――家の、種用の雌鶏を、――どう

しよう。どうせ取って行くんだったら——ちゃんと

區別して、獸も――雄鶏を、持てければよかったのに。

こともあろうに――大事な――我が種用の雌鶏を――

どうしよう。

夫（妻に）こ、こ、こ、こは、よ、よ、寄らなかつた

かい？

夫
し、し、心配になって——ね、ね、ね、寝てるの？

妻
ええ。

ケオ　もう、行かなきゃね。餓鬼たちを、残して、来た

んだから——目も当てられない様だろう。ふん——将

師だろうが、龍馬だろうが――仇だ――仇だ――（あ

わてて出る）

同じ日の夜。夫、妻、向い合つて坐っている。赤ん坊は傍で寝

ている。

種袋が「ウツモク」に、

二人、耳をそばだてる。

風の音。

妻
捕えられるかしら。

夫
そ、
そ、
そ、
そうだね。

狼の鳴き声。

三場

同じ舞台。妻と「ケトンオモム」が一緒に入ってくる。

二人ともに鍬を持っている。

妻 目を醒していないかしら。(「ケトンオモム」に)今——

戻ってきた——ところなの。(部屋に入り、赤ん坊を抱いて出てきて、庭で乳を飲ませる)

ケオ (見ながら) おや、おや、おとなしいね——(坐り込む)

ああ——苦勞の絶える、暇が——ないよ。雪に、恵まれたから——今年は、豊年になるかと、思ったのに、——思いもよらない——龍馬のため、男という、男は——全部——山に、動員されて——龍馬探し。いつ、畑を、耕して——いつ種が、蒔けることやら。それ、ばかりか、もう——十日目——食糧だの、鶏だの、団栗だの、といって——村から、掻き集める。これでは、龍馬狩りか——人間狩りか、さっぱり、判らないね？

妻 お宅の、鶏は——

ケオ どの、鶏を、言うの？

妻 雄鶏の、ことよ。

ケオ だから——どの、雄鶏の、ことさ。

妻 雄鶏が——何匹も、いたんでしたっけ。

ケオ 獣の、雄鶏か、人間の、雄鶏か、どっちの雄鶏か

といってるのさ。

妻 まあ——、「ケトンオモム」ったら——

ケオ 獣のほうは、もう——三日、前に、持って、行かれたし、人間の、雄鳥は——まだ山の中にいるよ。

妻 家の、主人は——昨日の、昼間——ちょっとだけ、寄って、行ったんだけど。

ケオ それで、なんて言っただの？ 夏まで——あそこで住むとか？ それとも龍馬でも、産んで——持ってくるとか？

妻 今日あたり——下りてくるかも、しれないんですけど。

ケオ そう？ 全部——中止して？

妻 お聞きでしょうけど、なかなか——握まえられないんだそうですよ。

ケオ そうだってねえ。鳴き声を、聞いて——行ってみると——また、向うの谷間で、鳴いている。まるで狐に——つつまれた、みたいなんだってさ。それが、誰の——せいかわ、——憂さ晴らしは——村の、人たちに——する。しかも、この頃では、「ナウリ」たちは——昼も、夜も、——鶏だの、餅だの、お酒ばかり飲んで、夜に——馬の、鳴き声が、聞えると——うちのら

妻 —「アボム」たちを、行かせるんだ——そうだよ。
そんな。

ケオ でも、まあ、とにかく——そうね——今年の、農
事が、たいへん——じゃない。いつ——種を——蒔く
ってのさ。

妻 今日あたり——下山するんですってよ。

ケオ あ——そう言ってたね。

妻 ええ。

ケオ 仕事も——出来ない、くせに——罪もない人たち
に——面倒ばかり、かけて。そうさ——龍馬は、靈物
なのに——ふん——人間の、手に、掴まえられるもん
か。

妻 そうみたいね。

ケオ 当り前さ。将師を——乗せるために、来た、馬だ
もの。——家の——「アボム」なんかの、手で、掴ま
えられるはずがない。あの人——御しやすい——馬
は、この広い天地の、中で——このあたしのほかに——
いるもんか。

妻、聞かなかったふりをして、子供を部屋に寝かせてから出る。

ケオ おとなしい——おとなしくて良い子だ。さ——行

かなきゃ。明るい、間に——もう、少し——やってお
かなきゃ。まったく、夜——少しくらい、苛められた
って、早く、帰って来てくれなきゃ。そうさね。あの
——薪を担ぐ、力と、鋤を持つ、力が、あれば——将
師なんて、村の人、全部が——将師じゃないかね。食
べるだけは一人前の、家の餓鬼たちが——まったく——
動かないから、一人で——畑仕事やら、木樵りやら、
飯炊きやら。

二人、道具を担いで出ようとする。

妻 あそこを見て。(遠くを指差す)

ケオ あら、——下りてくるじゃない。

妻 ええ。あっちの——川辺に、「ナウリ」たちが——
ケオ 「ウヅ」⁽⁸⁾△_△△のほうに——行かないで、どうし
て——こっちにやってくるのかね？

妻 本当——そうね。

ケオ あれを——見てごらん。

妻 は？

ケオ あそこで——休む、気かね——

妻 ええ——そう——みたいね。

ケオ 行ってみなくちや。(「ケトンオモム」急いで出る)

妻、ついて行こうとしたが、ふと部屋を振り返ってみる。
部屋の中で、気配がする。

妻 起きたのかしら。(戻って戸を開ける)
妻 わっ／＼

尻餅をつきながら庭に転げ落ちる。

がたがた震えながら部屋の中を覗きみる。

開いた戸から部屋の中を歩いている子供が見える(人形)。

腕をばつと広げ上げたり、下げたりしながら、どしんどしん歩
きまわっている。

妻 ああ、なんてこと。どうしよう。どうしたらいいの。

(坐ったまま、そろりそろりと這って敷居を掴む)

妻 ああ、赤ちゃんよ。私の赤ちゃんよ。

子供 (拡声器から出てくる声、山彦のように)堪えられない／＼

妻 ああ。

子供 (山彦のように)堪えられない。

妻 いけない、赤ちゃん、だめよ。

照明、真赤な光、血の色のよう。やがて血の色の照明、なく

なる。

唾のような身振り、手振り、腰を伸して立つこともできない
妻。

部屋の中でどしんどしん歩きまわっている子供。

妻、近づき、部屋の把手とてを手でかける。

妻、耳をそばだてる。劇の最初の場面で夫を待っている時と同じように。しかしその時とはまったく異なる心情で。

気配がするたびに耳をそばだて、そうしては子供のいる部屋の
ほうを伺い見る。

この動きの繰り返し。

気配。

妻、「サリツムン」／＼柴戸の前に出、遠くを見つめる真似。

夫、入ってくる。

疲れて、ふらふらした足取り。

「マンテーギ」／＼行李を下し、どすんと庭に坐る。

夫 あ、疲れた。

妻 ……

夫 む、無駄骨だ。

妻 ……

夫 ウォ、ウォ、「ウォンニム」は、ど、ど、ど、怒髪
が天を衝いたんだと。

夫 妻

……
ナ、「ナウリ」たちは、い、いっぱい、ど、ど、毒
氣づ、づ、づ、づいて。

夫 妻

……
ウオ、ウオ、「ウォンニム」が、お、お、おっしゃ
るには、う、う、馬を、つ、つ、つ、掴まえられなか
ったら、ウ、ウ、「ウブ」に、は、は、は、入ること
は、で、で、できぬとよ。

妻

……

遠くから「ボジョル」たちの歌声。

夫

あれを見る。あ、あのようにか、か、川の向うで、
よ、よ、夜明しを、し、し、して、あ、明日は、む、
む、村ごとに、し、し、調べて、しよ、しよ、将師を
さ、さ、探し出すんだそうだ。ま、ま、まったく、こ、
この――

夫 妻

……
（初めて、妻を直視し、口籠もる）
……

妻、夫を見つめる。

夫 妻

……
――ど、ど、ど、どうかしたのか？

夫 妻

……
うん？

夫を眺める。

夫 妻

……
い、一体、ど、ど、ど、どうしたんだ？
（首を振る）
（妻の腕を掴みながら）――？

夫、ふと、四方をみる。
何も捜し出せない。

妻

（部屋の様子を見る。戸は締まっている）

部屋から気配がする。

夫 (そちらを見る) なんだ。なんだ？

そちらに行く。

妻 (止める)

夫 (何かを感じた、恐れた身振りで) うん？

妻 (掴んでいた腕を放す) あなた。

夫 ……

妻 た、大変なことになったの。

夫 な、なに？ (氣づいて、部屋に向かおうとしていた足を

止める) は、は、は、ほんとかい？

妻 (首肯)

夫 (部屋のほうを凝視する)

部屋の中で気配。

夫、妻を見る。

妻 (首肯)

把手を掴み、引っ張り廻す子供。

夫 あーあ。(どすんとしゃがみ込む)

妻、その傍にしゃがみ込む。

二人、顔を見合わせる。

そして、部屋のほうを振り返って見る。

夫 お、お、お、おまえ。(立ちあがって部屋に近づく。妻

を振り返る)

妻、立ちあがって夫の側に行く。

妻、先立って部屋の戸まで来、把手を開けようとしたが、やめて、開いた穴から中を凝視する。

場所を譲る。

夫、眺める。

夫 わあー。

尻餅をつく。

壁のようにのそのそ後退りして庭の真中に出る。

妻は部屋の戸の前に立ったまま。

夫 (抑えた声で) お、お、お、おまえ。こ、こ、こ、こ、

このことを――

妻、立ったまま。

夫、手振りで妻を呼ぶ。

妻、立ったままである。

夫、又、手振りをする。

妻、庭に出る。

前のように夫の傍にしゃがみ込む。

夫
ど、ど、ど、ど、どうしよう？

妻、夫を見る。何にも聞えない様子である。

夫
ど、ど、ど、どうしたら。

妻
……

二人、見合ったまま坐っている。

長い間。

遠くから「ボジョル」たちの歌声。

二人、耳をそばだてる。

風の音。妻、びっくりする。

夫
か、か、風の音だよ。

妻、立つ。

台所に入り、「ソクリ」へ竹籠Vを持ってくる。

「ソクリ」の中の山菜を部屋の前に積み上げ、戸を塞いで坐る。

夫、妻の動きを目で追う。なりゆきを知らぬふう。

やがて、事の次第を悟って少しだけ首肯く。

そして、「サリムン」のほうをちらっと見る。

把手、また揺れる。

妻
(ゆっくり、普通の子守歌の節で)

我が子は良い子 可愛い子

乳も飲まずに 成長し

駄々をこねつつ 育ったが

凶作になりゃ 泥棒さ

泥棒すれば 広い世に

行くところなど ありやしない

役所の柱の てっぺんに

さらし首だよ なれの果

黒い鵲

ついでめば

母も痛い

子も痛い

泣き泣き暮す

身の上に

ああ恐ろしや

よその子は

我が子は良い子

可愛い子

把手、もう一度がたがたする。静寂。

夫、妻のほうを見、そして「サリツムン」のほうを伺う。

妻、何気なく山菜を弄くる。

二人、耳をそばだてる。

夫 — か、か、か、風の音だよ。

風の音。

妻、又山菜を手にする。

夫、妻の手の動きにつれ、視線を移す。

妻 (立って台所に入る)

夫、後ろ姿を追う。

妻、出てくる。

夫、妻がまた戸の敷居の前に坐るまで目で追う。妻が又山菜を

取り揃え始めると、追うのを止め、ちらっと「サリツムン」の

ほうを見る。暫くの間、又妻の手の動きを追いつめる。少し尻

を上げ、妻に何か話そうとしたが止める。

夫、立ちあがって裏の方に行く。

薬を持って出てくる。

妻、眺めている。

夫、「サリツムン」の前に薬を広げて、縄を縛う。

長い間。

夫、ふと手の動きを止める。

つられるように、妻も止める。

外で気配。

間。

夫、引き摺るかのような足取りで、「サリツムン」に近づく。

耳をそばだてる。

気配。

ため息をついて戻る。

妻の視線を受けながら、

夫 り、り、り、り、栗鼠。

妻、肩を落す。

又、山菜を手にする。

夫、縄を綯う。「ボジョル」たちの歌声。

綯うのを止めて妻のほうを見る。

妻、構わず、山菜を取り揃える。

梟の音、急に。

二人、びっくりして顔をあげ、見合う。

それから部屋の中の気配を伺う。

又、山菜を取り揃え、縄を綯う。

間。

気配のない部屋の中。

急に舞台、翳になる。

二人、驚いて空を見る。

夫　く、く、く、く、雲――

ゆっくり翳が過ぎ去る。

又、明るくなった舞台。

この時、把手、大きく揺れる。

夫、飛びあがり、耳を塞ぐ。

部屋の戸を点検し、耳から手は下ろしたものの、狼狽して「サリムン」のほうを伺う。

妻を振り返って見る。

妻　（ゆっくり、悲しげに）

我が子は良い子　可愛い子

乳も飲まずに　成長し

駄々をこねつつ　育ったが

凶作になりや　泥棒さ

泥棒すれば　広い世に

行くところなど　ありやしない

役所の柱の　てっぺんに

さらし首だよ　なれの果

黒い鵲　ついはめば

母も痛い　子も痛い

泣き泣き暮す　身の上に

ああ恐ろしや　よその子は

我が子は良い子　可愛い子

把手をゆさぶる音、急に止まる。

この間、夫は「サリツムン」の前で見張りをしていたが、戻ってくる。

妻、何事もなかったかのように山菜を取り揃える。

夫、坐り込んで縄を縛う。

心の中の恐れを縛うように、そのような身振りで。

夕やけ、照らし始める。

だんだん濃くなる夕やけの色。

真赤な、血の色のような夕やけ。

紫色に変わる。

急に暗闇。

間。

この時、遠くから馬の鳴き声。

二人、飛びあがるほど驚き、堅くなる。

夫の顔だけに照明。やがて妻の顔にも照明。

把手をゆさぶる音。

子供

(拡声器で、山彦のように) 腹減った。

妻、立ちあがる。

夫、立ちあがる。

妻、部屋の中に入る。

舞台、完全な暗闇。

間。

部屋の中に明りがつく。朧げに。

妻、出てくる。

妻の顔に丸い照明。

夫の顔に丸い照明。

二人、庭の真中まで出、坐り込む。

間。

梟の声。

耳をそばだてる二人の顔(照明のあたった)。

気配。

顔を照らしていた照明、消える。

舞台、暗闇。

間。

照明、又、夫の顔だけを照らす。

夫 と、と、と、鳥が——と、と、通り過ぎたんだよ。

妻の顔にも照明、入る。

羽ばたく音。木から木に移る鳥の、

梟の鳴き声。

照明、消える。

間。

暗闇の中の舞台。

狼の鳴き声。

やがて、息をつくかのように、

照明、入る。

体を縮めて坐っている二人。

やはり照明は顔だけ。

二人の顔、部屋のほうに振り向く。

急に立ちあがって把手をゆさぶる子供の影。

把手の揺れる音。

夜の静けさの中で、

雷のように、大きく。

夫

(照らされた顔が妻のほうを見る)

(ゆっくり、悲しげに)

我が子は良い子 可愛い子
乳も飲まずに 成長し

駄々をこねつつ 育ったが

凶作になりや 泥棒さ

泥棒すれば 広い世に

行くところなど ありやしない

役所の柱の てっぺんに

さらし首だよ なれの果

黒い鵲 ついばめば

母も痛い 子も痛い

泣き泣き暮す 身の上に

ああ恐ろしや よその子は

我が子は良い子 可愛い子

間。把手をゆさぶる音、止まる。

もう一度、馬の鳴き声。

一層激しくゆさぶられる把手。

夜の静けさの中で、

その音は、

雷のように、大きく、

山彦のように。

「僕の馬／＼」

拡声器を通した子供の声。

夫 （急に立ちあがって）お、おまえ。（妻を見下ろす）

妻 （見つめていたが）だめよ！

夫の足を掴まえてぶら下がる。

夫 ——（掴まえられたまま、暗闇の中を凝視する）

山彦のように、子供の声。

「僕の馬／＼」

把手ががたがたする。

夫、妻を蹴飛ばして、

部屋のように近づく。

妻、又ぶら下がる。

夫、強く蹴飛ばす。

倒れる妻。

夫 （戸を開けて部屋に入る）

障子紙に映る影。

大きな影が小さい影を横たえる。

子供の上に積みあげた大きな袋の影。

夫、外に出る。

妻、ぱっと立ちあがる。

夫、妻を掴んで庭に坐り込む。

妻、身悶えをするが、夫、放さない。

障子紙に映る影。

しきりに腕く、袋に押しつぶされた小さな人の影。

長い間。

部屋から（山彦のように）「お母さん／＼」。

妻、立ちあがる。

夫、妻を前のように突き飛ばす。

夫、部屋に入る。

もう一つ、重ねられる袋の影。

夫、出る。

前のように妻を抱き締めてしゃがみ込む。

時々首をあげ、障子紙に映る影を見る。

やがて、動かなくなつた影。（山彦のように）馬の鳴き声（もの悲しく）。

部屋の中の灯火、消える。

月の光。

月の光、だんだん暗くなる。

雲に覆われてしまった月の光。

風の音。

暗闇。

朧な月の光。

「チゲ」に何かを背負って出る夫。庭を横切る。

舞台、暗闇。

風の音。

四場

次の日の明け方。

鳥の声。

舞台には人がいない。

部屋の戸は締まっている。

遠くから歌声、聞えてくる。

我が子は良い子 可愛い子

乳も飲まずに 成長し

駄々をこねつつ 育ったが

凶作になりや 泥棒さ

歌声、だんだん近づいてくる。野太くて囁れた声。しかしはっきりとした声。老婆、出てくる。前と同じくぼろぼろの着物である。但し、腰に巻いた包が脹らんでいる。丸い瓢（ひょう）を巻いているかのようである。

妻、裏庭から出る。老婆を睨みつける。

老婆 見つけたよ。（包みを前にする）家の子を見つけた。

妻、裏庭に廻る。老婆、土に坐る。包みを撫でながら、ゆっくり、ぼつりぼつりと子守歌を口ずさむ。ほとんど聞えない。たまに節が高くなることによって、未だ歌っていることが判る。妻、腑抜けたように出てくる。老婆に水を一杯、やる。

老婆 どうも（飲む）。ありがとう。（「サバル」を土の上に置く。そして又、包みを持ち直す）おまえは、寒くもなければ暑くもなく、渴きもなければ腹もへらない、我が子。むずかり知らずの我が可愛い子。（立ちあがる。妻、瓢のように脹らんだ所を目で追う）行こうよ。行って、鳥が鳴き、日当りの良い所、この母の畑仕事場、その

枕に葬^もってあげます。さ、行こう。(歩きながら片手で包みを撫でる) 軽い、軽いね。赤ん坊の頃よりもっと軽いいよね。(出る。子守歌を歌いながら)

妻、老婆が出て行くのを見ている。老婆が過ぎ去ったほうを見つめる。鳥の声。のどかな春の日である。鳥の声に交じって老婆の子守歌、聞えたり、絶えたりする。妻、それに耳を傾けて立っている。

部屋の中に入る。

間。

夫、「チケ」を負って、入ってくる。手には鋏を握っている。

黙って「チケ」を下ろし、そのまま立っている。

やがて、力無く、

夫 お、お、お、おまえ。

裏庭に入る。

出てくる。

「サリムン」を潜りながら、左右を見回る。

暫く経って戻ってくる。

庭に坐り込む。肩を落して。

間。

ふと、部屋の戸を見、それを開ける。
大梁に首を括った妻(人形)
夫、飛んで行って、引きづりおろす。

夫 お、お、お、お、おまえ。

妻をゆさぶる。

やがて、妻の傍に坐り込む。

膝の間に頭を埋めている。

間。

立つ。

解いた腰紐を大梁にかける。

馬の鳴き声。

「サリムン」のほうから龍馬に乗った子供(馬、子供、全部が人形。抽象的な構造の)、庭に入ってくる。

舞台、暗くなる。馬と子供、そして夫の頭に落ちる部分照明、

及び部屋の中に横たわった妻を上から照らす照明。

夫 (庭に下りようとするが、龍馬と子供を発見し、そこに坐

り込んで) お、お、お、お前をう、う、う、う、う、埋

めてき、き、き、きたところなのに。

子供

(首を振りながら、持っていた躑躅の花束を父にやる)

夫 (夢の中のことのように、近づいてそれを受け取る)

子供 お母さん、お母さん、(拡声器を通した声)

夫 (部屋の中に入り、花束を妻の胸の上に置く) お、お、

おまえ お、お、おまえの、こ、こ、こ、子供が、も、も、持って来たんだよ。お、お、お、おまえの、こ、こ、子供が、い、い、い、い、生き返ったんだ。

妻 (人形)、花束を持って立ちあがり、庭に出る。

妻、子供のはうに歩いて行き、子供を抱き寄せる。

子供 (拡声器を通した声) お母さん、お父さん、早く乗

って。

夫 (妻を馬に乗せながら) さ、さ、さ、さ、い、行け。

は、は、は、は、は、早く行け。ひ、ひ、ひ、ひ、人々がく、く、く、く、来るかもしれないよ。こ、こ、こ、子供がし、し、し、死んだとい、い、い、言つといたからむ、む、む、む、村人たちがく、く、く、く、く、く、来るはずだ。

子供 (手振り)

妻 急いで、急いで、「ポジョル」たちが、来るわ。

夫 (袖で涙を拭きながら) わ、わ、わ、判った。

最後まで乗らずに、

龍馬の手綱をとって「サリムン」を出る。

舞台、又明るくなる。

空いている舞台。

数人の村人と「ポジョル」たち、入ってくる。

村人一 もーし。

「ポジョル」八捕卒、一人、乱暴に把手を引っ張る。

ポジョル一 どこだ？

ポジョル二 間違いはないだろうな？

村人一 へえ。引付を、起して、昨夜に。

ポジョル三 ふーむ。

村人一 山に、埋めて来た、ところだった、そうですが。

村人二 おい、あれを見ろ、あそこだ。

人たち あっ、あれは。

三人が馬に乗って空に上がって行く。

花を投げている。

行ったら玉皇上帝に申し上げてくれ。この村に

は、これから絶対に、将師をお送りなさらないように。

人々が一言ずつ言うのと、

空から、

空から 我が子は良い子

可愛い子

人たち フォーイ、もう来るなよ、フォーイ フォイ

(畑で鳥を追ひ払う真似をしながら)

空から 乳も飲まずに

成長し……

人たち フォーイ、もう来るなよ、フォーイ フォイ。

人々、いつの間にか手や足で拍子を揃えながら踊り出す。肩や首も動かし始める。巫女踊りのように、農樂踊りのように、踊りながら

空から ……駄々をこねつつ

育ったが

凶作になりや……

人たち フォーイ フォイ、もう来るなよ、フォーイ、
フォイ。

だんだん興味が薄く。

空と地上の、

やりとりの中で、

ゆっくりと。

△註▽

(1) 鳥などを避けさせる場合の擬声語。

(2) 「アレツモク」とは「オンドル」の部屋で焚口に近い部分のことで、普通、家長の座となる。反対部分は「ウツモク」という。なお、「オンドル」は焚口からの加熱で保温する仕組みになっている韓国に広く分布している暖房装置である。

(3) 鷺足の華足がついた丸い食膳。

(4) この部分は原文も解釈しにくいためそのまま訳したが、訳者の意見としては豊年であることと泥棒がないということは同じことである、という意味であろう。

(5) 「ケトン」は犬の糞の意。「オモム」はお母さんの卑下語。一方、お父さんの卑下語は「アボム」である。昔の平民にはこのような呼び方が多かった。例えば、「セドルオモム」など。

— 幕 —

(6) 韓国の古来の着物。上を「チョゴリ」下を、男性用を「バジ」、女性用を「チマ」と呼ぶ。

(7) 酒、醬油、砂糖を交えて炊いた労働者用のお握りみたいな御飯。

(8) 人口、二万以上、五万以下の小都市で地方行政区域の一つ。縄や紐で編んだ背負い袋。

(9) 道教でいう天上世界の神。万物の主宰者。

(10) 農民の吹奏楽で、どら、笛、鉦、太鼓、小鼓などを用いる。

★ ★ ★

作者の言葉

一、この話は平安北道に伝わる伝説である。

二、原話は子供を殺すところまでである。

三、この伝説の象徴する構造はキリストの生涯——絶対者の来世、乱世での短い生活、殉教、昇天のそれと同じであり、旧約聖書の出エジプト記の過越節の由来とも同型である。

四、戯曲として読む場合は宗教的な先入観なしに、人間の普遍的な悲劇として読むことができると思う。

五、上演に際しては、演出指示にもあるように科白と動作はゆっくりと、しかも純朴な雰囲気が滲み出るように

したほうが望ましいし、このような悲劇があまりにも合理的に解釈されてはいけないと思う。

六、運命を自ら判断し、切り開く能力のない人たちの重くて暗い話として表現されるべきである。

七、人物たちは人形のように、照明、音響、その他の演出手段の一つのように演ずること。

八、最後の場面では事件の経緯とは無関係に楽しく踊るところ——地上の人たちはものに憑かれたように。

★ ★ ★

『昔々フォーイフォーイ』についていくつか記しておきたいことがある。

この作品の作者である崔仁勲（一九三六―）は、元々小説家として知られている人である。それも歴史とかかわりのある作品が多く、例えば彼の代表作である『広場』は、韓国動乱（Korean War）の時のイデオロギー問題を含めている長編で、彼の作品の傾向を端的に代弁していると言われている。が、ここに訳した『昔々フォーイフォーイ』は、このような彼の作品傾向とは一線を画する傾向のものである。この作品は小説ではなく戯曲で、しかも民間に伝わる伝説から素材を取っており、内容も、貧しい庶民の哀歎を描きながらそこにあ

る種の夢を与えている。このような事実は、今後の崔仁勲研究に一つの方向を提供し得ると思われるので、まず記しておく。

つぎに、この作品の母体となった子供将帥の伝説を挙げておきたい。「作者の言葉」にも示されているように、崔仁勲は韓国の全国に広く伝わるこの伝説の中で平安北道のものを参照して『昔々フォイフォイ』を書いた。それを『平安北道道誌』から引用してみると、次のとおりである。

「将帥を亡くした龍馬のいななき」

——博川「元帥峰・馬嘶岩」の故事——

昔々、博川の元帥峰の麓にあら屋が一軒あった。ある日、この家の上さんが玉のような男の子を産んだ。

貧しいばかりではなく、近所に人家もなかったため、上さんは自ら臍の緒を切り、お産の後の飯の仕度も自ら用意する有様であった。

お産の翌日のこと、上さんが台所の仕事をしていると、部屋から赤ん坊の泣き声ではない、片言話す声が聞えてきた。上さんは不思議に思っ、隙間から部屋を覗いてみた。ぎょっ／＼ 生まれたばかりの子供が一人で壁をつたってよ

ちよち歩きをしながら何かをしゃべっているではないか。上さんはびっくりして部屋に飛び込み、子供を抱いて体のあちこちを調べてみた。そして再度驚いた。脇の下に翼が生えつつあるではないか。将帥である。

平凡な人間ではないことを悟った瞬間、上さんの脳裏には喜びより不安が先立った。万が一、役所にこのことが知られたら、家中皆殺しにあうのではないか。上さんは考えたあげく、人に知れる前にこの子を殺そうと決心し、子供の腹の上に小豆袋をのせておいた。すぐ死ぬだろうと思っていた小豆袋の下の子供は、二日経っても死ななかつた。小豆袋をもう一つのせて押えつけた。子供は堪えきれず、やがて息を止めた。

その日の夜から暫くの間、元帥峰の絶壁のうえからゆえなき馬のいななきが悲しげに聞えてきて村人たちを驚かせた。これははかならぬ将帥を亡くした龍馬の鳴き声であった。その後、村人たちはこの岩を馬嘶岩と名づけたと言われる。

三番目に、この作品の初出と評価について述べておくと、この作品は最初に一九六七年の『世界の文学』創刊号に発表された。初演は、劇団「山河」によって、同劇団の第三五回

公演として、一九七六年一月五日から一日までソウルの中心部にあるセシル劇場で行なわれたが、『韓国演劇』（一九七七、一月号）によると観客動員数が一八一九名にのぼったとあるから、評判であつたらしい（セシル劇場は小劇場である）。なお、この作品は今に至るまで多くの劇団によって演じつづけられているし、崔仁勲はこの作品で一九七七年の韓国日報戯曲賞を受賞している。一方、この作品は海外にも翻訳され、一九七九年には、崔仁勲がこの作品の公演を参観するため、アメリカを訪れたこともある。

最後に、この作品の日本語訳を許可して下さった作者と、翻訳にあたつて助言を惜まなかつた韓国文化院の安岡明子氏に深く御礼申しあげたい。そして、この訳は『崔仁勲全集』（文学と知性社、一九七九）によるものであることと、登場人物の中の何人かの科白の中には、庶民たちの生活ぶりを生々しく伝えるという意味において、原文とおりでないがある特殊な地方の方言を使ったほうがよかったかもしれないことを付記しておく。